

息長氏の遺宝

山津照神社古墳とその周辺

米原市教育委員会
2008.3



息長氏

～古代天皇家を支えた名族～

息長氏は、近江国坂田郡（米原・長浜両市域）の南部地域、現在の米原市近江地域付近の天野川（息長川）流域に本拠地を置いていた古代豪族です。息長の名前がはじめてあらわれるのは、現在最古の歴史書『古事記』と『日本書紀』。古事記では、開化天皇段に「息長水依比売」の名が、日本書紀では仲哀天皇条に「氣長足姫命（神功皇后）」の名がみえます。その後も、息長氏は天皇家に后妃を入れ、天皇の親族（皇親）として国政や修史事業に携わりました。

息長氏の勢力拡大には、三つの段階があるといわれています。一つ目は、仲哀天皇の妃である神功皇后が息長氏の出身であることです。これは一地方豪族にすぎなかった息長氏が、やがて中央の政権に進出する大きな布石となりました。

二つ目は、継体天皇への支援。近江高島の生まれで越前で育ったとされる継体が、大和以外の出身者として即位した背景には、継体の拠点である高島・越前と、支持基盤である尾張・美濃の両者を結ぶ要衝の地にあった息長氏が重要な役割を果たしているようで、これが息長氏繁栄の契機となりました。

三つ目は、敏達天皇と広姫の婚姻です。息長氏出身の広姫が皇后となって、のちの舒明・天智・天武天皇へと系譜をつなげたことは、息長氏の勢力拡大の大きな要因となりました。さらに、壬申の乱では緒戦の激戦地が本拠地であったことから一定の功績があったとされ、勝利した天武天皇のもとで、天皇制の基盤を固めた皇親政治の一翼を担いながら、あわせて国史編さんに携わったことは、息長氏の名を正史の中につよくとどめておくことになったのでした。

息長古墳群

長浜平野の東側を南北に伸びる横山丘陵の南端部から、天野川流域にかけて、古墳時代前期から後期に至るまでの長い期間築造の続いた息長古墳群が存在します。

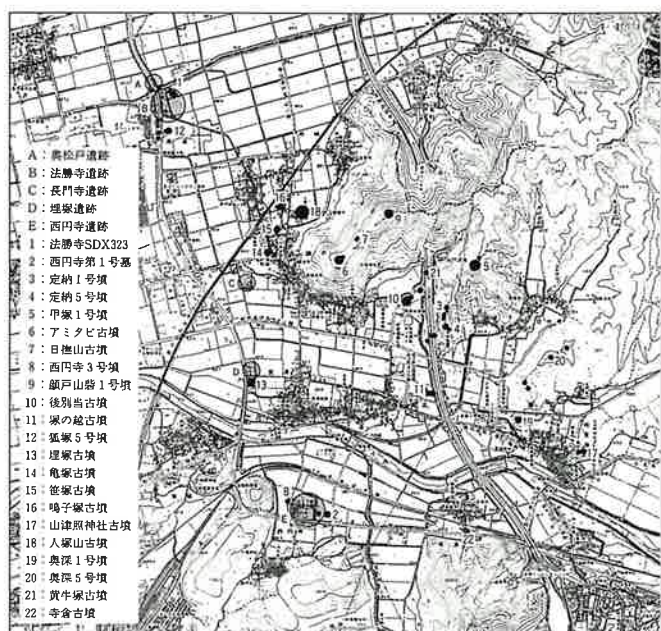
息長古墳群は、旧村名「息長村」(昭和30年まで存在)の名称からつけられたもので、前方後方形周溝墓「法勝寺S D X 323」(3世紀前半)、円形低墳丘墓「西門寺第1号墓」(3世紀後半)、尾根上の前方後円墳「定納1号墳」(4世紀)、岩盤をくり抜いた墓壙をもつ円墳「奥深5号墳」(5世紀)、豊富な形象埴輪をもつ帆立貝形古墳「狐塚5号墳」(6世紀初頭)、周濠を備えた前方後円墳「塚の越古墳」(6世紀初頭)などに続き、横穴式石室を備え、豊富な副葬品を有するものとも有力な前方後円墳「山津照神社古墳」(6世紀前半)が、この古墳群中「最後の前方後円墳」



息長古墳群と周辺の遺跡（森下ほか2005より）

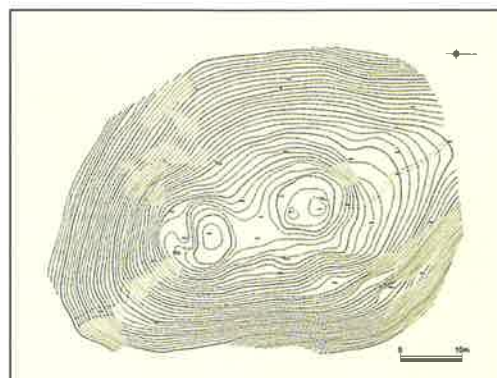
と評価されています。

こうした息長古墳群の変遷と、周辺の集落遺跡の関係が近年の調査成果からみえてきました。弥生時代後期から古墳時代にかけての集落遺跡は、顔戸遺跡群（法勝寺遺跡・高溝遺跡）を経て、古墳時代前期はじめには水辺の祭祀遺構がみつまっている黒田遺跡が中心的な位置を占めます。丘陵上に定納古墳群が構築された前期後半～中期前半に対応する集落遺跡としては、古墳群の眺望が可能で、大量の木製品が出土し、その生産を担っていたと考えられる入江内湖遺跡群が想定されています。中後期に対応する集落遺跡は、今のところ判明していませんが、塚の越古墳周辺に移動していた可能性があります。

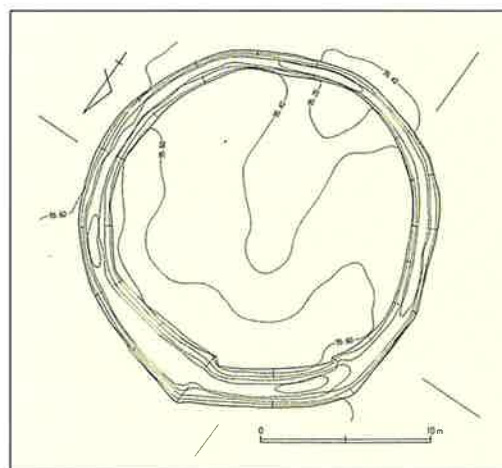


息長古墳群の主要古墳

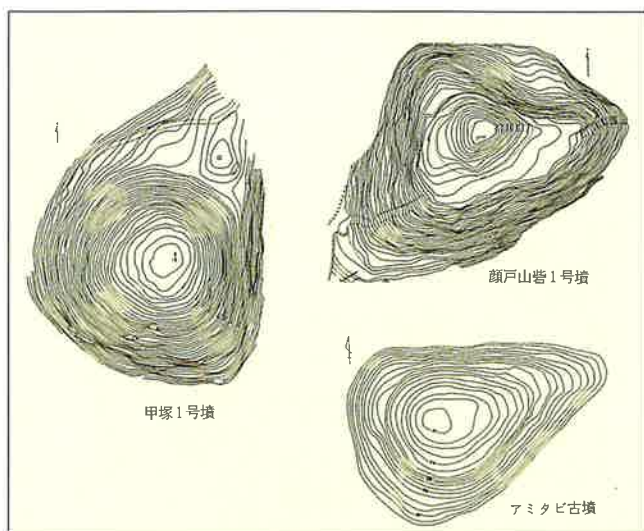
東山道（中山道）は米原市を横断し、息長古墳群の南西眼下で北陸へと分岐します。この地域は、いつの時代も東海、近畿、北陸各地域のさまざまな文化が波及し、融合して在地の文化が育まれました。また、天野川河口の朝妻港は湖上交通の起点として経済・政治活動のうえで機能してきました。



奥深3・4号墳



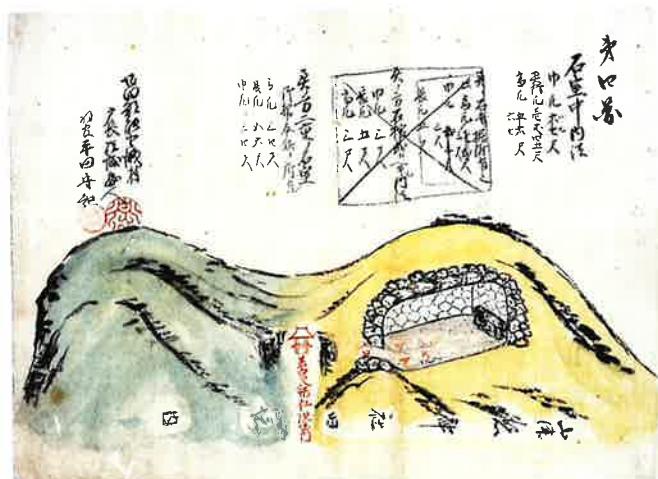
西門寺3号墳



甲塚1号墳・顔戸山第1号墳・アミタビ古墳

山津照神社古墳の発見

横山丘陵南端尾根上にある前方後円墳で、東西方向に主軸があり、東に後円部、西に前方部をもつ全長46mの古墳です。明治15年（1882）、神社の社殿の移転造営に伴い境内の拡張工事がおこなわれた際に、後円部に設けられた横穴式石室が不時発見されました。神社にはこのときの詳しい経緯と、古墳や出土品に関する報告書が保管されています。とくに石室や出土品に関する詳細な絵図があり、絵図と記載から、後円部に「石門」（幅三尺、高五尺）「邃道」（凡一丈五尺）「室」（内法凡幅九尺、奥行一丈五尺、高七尺）からなる石室があったことがわかり、さらに「二重ノ石室 御棺奉鎮ノ所」を備えていました。古墳は滋賀県の指定史跡、明治15年の出土遺物は指定文化財〔考古資料〕になっています。

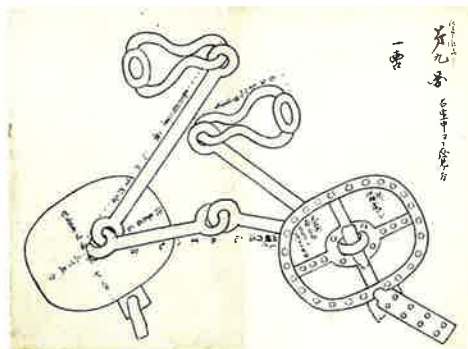


絵図 「第四図」



絵図 「第三図」

調書の「二重ノ石室」の記載から、北部九州系の内部に石屋形がある横穴式石室だった可能性があります。北陸にも見られることから、越の国と近江、北部九州をつなぐルートが存在が推測され、継体天皇の出現とも関連がありそうです。



絵図

『古墳二関スル書類』から

「第三図 （黄色）発見所 字竹木山亦オホキ共云 東西凡三十間 南北凡三十間 高凡貳丈

（赤絵）石室在所

隣地 東ノ方エン山 南西ノ方居村 北方林 井藪

中仙道 醒ヶ井宿ヨリ凡三十丁西 同樋口村ヨリ凡八丁西北 天ノ川 古名息長川ヨリ凡貳丁斗リ北 伊吹山ヨリ凡三里南西 湖水江凡一里余

坂田郡能登瀬村 戸長猪口織人㊤ 祠官平田守知㊤

「第四図

石室中内法 巾凡八、九尺 奥行凡壹丈四五尺 高凡六七尺

奥方二重ノ石室 御棺奉鎮ノ所力 高凡三四尺 長凡五六尺 巾凡三四尺

坂田郡能登瀬村 戸長猪口織人㊤ 祠官平田守知㊤

（朱書）若宮八幡神社現境内 （石室内に土器類の絵）」

出土遺物【滋賀県指定文化財／山津照神社所蔵：安土城考古博物館寄託】

このとき石室内部から出土した遺物には、銅鏡2面（^{どうきょう}仿製旋回式獸像鏡・^{ぼうせいにくうきやくもんきょう}仿製乳脚文鏡）をはじめ^{こんどうせいかんむり}金銅製冠、^{みわだま}刀、^{とうす}水晶製三輪玉、^{くつわ}刀子、^{ぎょうよう}馬具（^{くらかなく}轡・^{わあぶみ}杏葉・^{つばあぶみ}鞍金具・^{うず}輪鍔・^{つじ}壺鍔・^{うず}雲珠・^{つじ}辻金具・^{かなく}釣金具）、^{すえき}須恵器（^{ふたつき}蓋杯・^{ていへい}提瓶・^{ひろくちつぼ}台付広口壺・^{きだい}壺・^{はじき}器台）、^{ないこうかもんきょう}土師器（^{はじき}高杯）、^{せきしよくがんりょう}赤色顔料などがあります。これに「西ノ方岡山土中ヨリ発見ノ分」とする、銅鏡1面（^{ないこうかもんきょう}内行花文鏡）、鉄剣、鉄塊遺物が混じっているようです。この内行花文鏡は石室からの出土遺物群よりも古いもので、出土地については、西方の尾根上にある奥深1～6号墳などが候補にあげられています。



仿製旋回式獸像鏡（獸文鏡）



三輪玉



仿製乳脚文鏡（五鈴鏡）

5世紀後半から6世紀前半に東日本を中心に分布します。腰に吊り下げた装身具として使用されたようです。息長古墳群と東国とのつながりを示す資料です。



金銅製冠 破片



内行花文鏡



刀子

冠・鏡

金銅製冠は、鍍金（金メッキ）を施した帯状の銅版を、巻いて輪にした冠です。^{すかしぼり}透彫を施して、縁に沿って列点文を打ち出し、針金で吊り下げる飾り（歩揺）や、割ピンで留めたガラス玉をつけます。帯に山が二つある「^{ひろおびふたやましき}広帯二山式」の冠に復元できます。この冠は、滋賀県高島市鴨稻荷山古墳や福井県若狭町十善の森古墳出土のものと共通点があり、大陸の影響が強い遺物です。

^{ぼうせいせんかいしきじゅうぞうきょう}仿製旋回式獣像鏡は、直径13.2cmを測ります。仿製とは、中国の鏡をまねた国産の鏡のことで、中国の神仙思想を理解できなかったためか、^{しんぞう}神像1体と^{じゅうぞう}獣像5体が配された



雲珠（うず）・辻金具



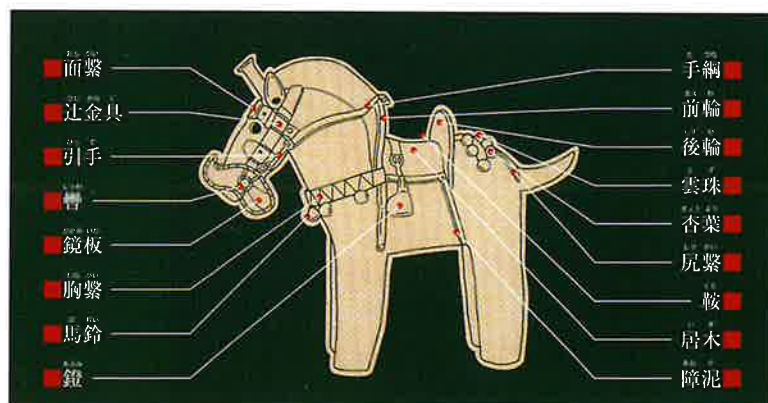
轡（くつわ）



壺鐙（つぼあぶみ）・鞍金具



杏葉（ぎょうよう）



馬具の名称

図柄などには姿態の崩れがみられます。仿製乳脚文鏡は、縁部に5つの鈴をつけ、直径8.4cmを測ります。内行花文鏡は、弧形を内側に向けて連ねて花の形に見立てた文様をもちます。

鉄刀・馬具・土器

鉄刀は4本以上のものが確認されています。なかには、水晶製三輪玉^{みわだま}で装飾していたものも含まれていたようです。馬具と須恵器は、6世紀前半から中葉にかけての年代を示すもので、古墳の築造年代を知るうえで貴重な資料といえます。



輪鏡（わあぶみ）



須恵器

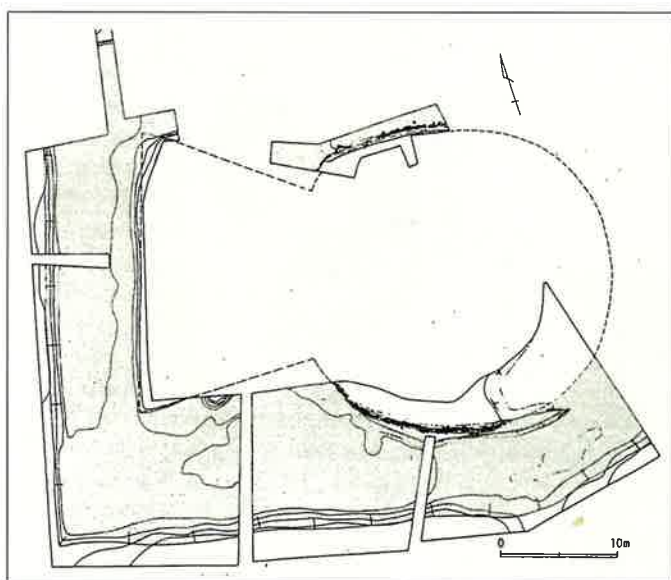


山津照神社古墳

息長古墳群の発掘調査① 一塚の越古墳・狐塚5号墳

塚の越古墳は平地に立地する後期前方後円墳です。東西方向に主軸があり、東が後円部、西が前方部で全長約46mを測ります。すでに墳丘の大半はなく、周縁部の発掘調査では、水田の下から周濠^{しゅうごう}が見つかり、古墳を飾っていた家形埴輪・人物埴輪・馬形埴輪・鶏形埴輪などが出土しました。また、墳丘裾部には石見型埴輪^{いわみ がた}が回っていたようです。

狐塚1～5号墳は平野部で見つかった埋没古墳です。5号墳は古墳群中最も古く、東西方向に主軸があり、西側に造り出しをもつ全長30mの帆立貝形古墳です。発掘調査では、周濠内から鳥形木製品が出土し、造り出し部からは家形埴輪・盾形埴輪^{ゆきがた}・鞆形埴輪^{た ち}・太刀形埴輪・蓋形埴輪・人物埴輪・鶏形埴輪など豊富な埴輪が出土しました。木製と土製の両方の埴輪を備えていたようです。



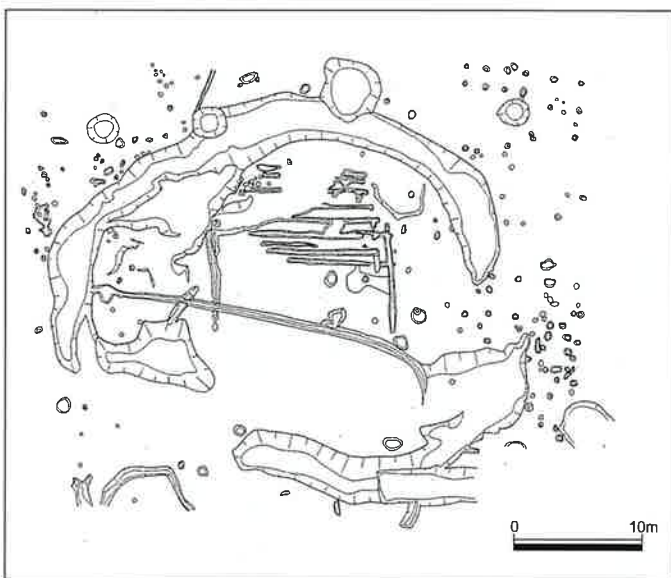
塚の越古墳



がもんたいしんじゅうきょう
画文帯神獸鏡（伝塚の越古墳）

かつて、この鏡とともに、勾玉や馬具または甲冑とみられる鉄製品が出土しています。（新庄薬師講所蔵）

【米原市指定文化財】



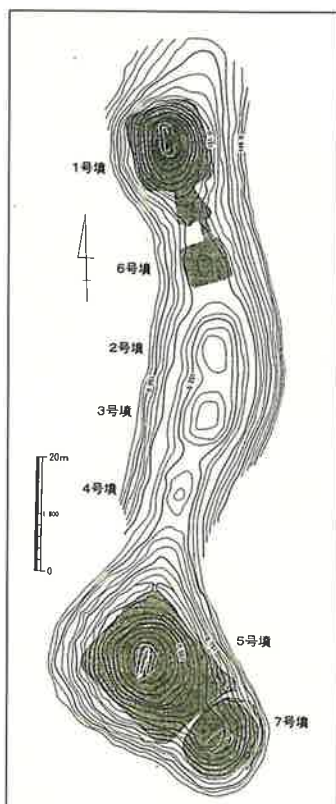
狐塚5号墳



狐塚5号墳出土の埴輪

息長古墳群の発掘調査② 一定納古墳群

横山丘陵南端の尾根上に築かれた古墳群です。道路工事で失われた2古墳を合わせて9基から構成され、1号墳が前方後方墳のほかは、いずれも方墳と考えられます。墳丘の形態から東日本の影響がみられ、東海・北陸と近畿を水陸の交通路で結ぶ要に位置する息長古墳群の特徴をうかがうことができます。古墳からは琵琶湖や主要な交通路、入江内湖遺跡などをみおろすことができます。古墳からは琵琶湖や主要な交通路、入江内湖遺跡などをみおろすことができます。発掘調査でみつかった埋葬施設は、墓壇内に長大な刳抜式木棺を納めたものです。棺内全面には赤色顔料が施されていました。全体に副葬品は少なく、1号墳から出土した筒型銅器は棺内の被葬者近くに置かれていたもので注目されます。一定納古墳群は古墳時代前期後半から中期前半にかけて継続して築かれました。



定納古墳群想定復元図



定納古墳群全景

手前から1号、6号、2～4号、遠景に5・7号



埋葬施設

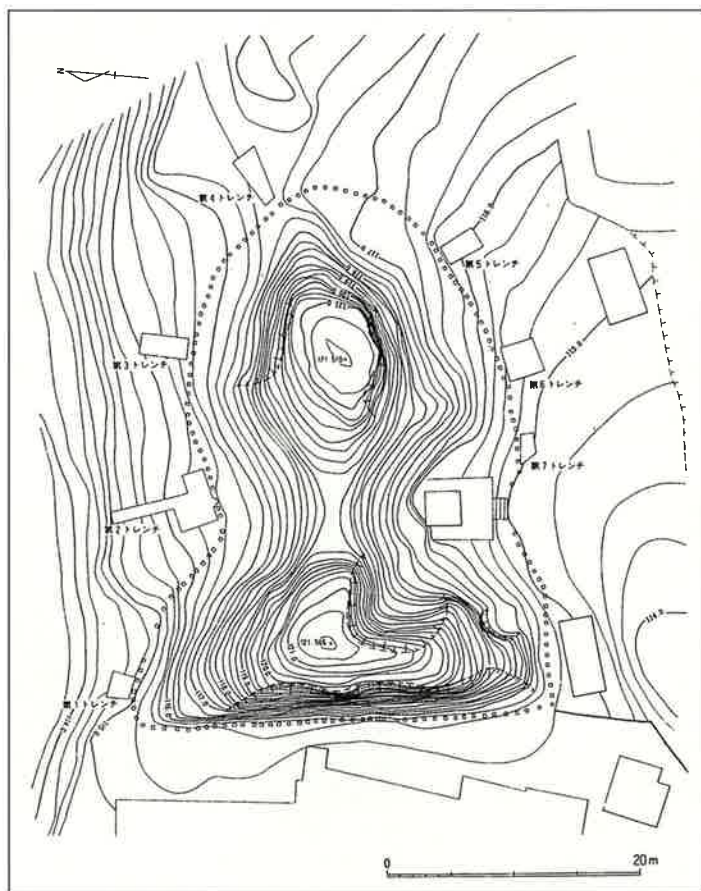
左：西棺 右：東棺



筒型銅器・銅製舌

息長古墳群の発掘調査③ ー山津照神社古墳

平成6年の調査では、古墳の裾部に埴輪列が巡っていたことがわかりました。埴輪列は、^{えんとう}円筒埴輪、^{あさがおがた}朝顔型埴輪と^{いわみ がた}石見型埴輪で構成されています。また、古墳北側のくびれ部には、人工的に整地された施設があったと考えられており、^{き だい}器台、^{おおがめ}大甕、^{ゆうがいたかつき}有蓋高杯など多量の須恵器が出土しています。発掘調査と、同時におこなわれた測量・立会調査の成果から、山津照神社古墳は、後円部の直径を8等分した長さ(3.3m)を単位として設計されていることがわかりました。全長は単位14倍の46.2m、前方部幅は単位12倍の39.6mに復元され、この築造プランが大阪府堺市^{は じ}土師二サンザイ古墳などの5世紀後葉以降に築かれた畿内の巨大古墳の墳形と相似形であることが指摘されています。



山津照神社古墳墳丘測量図



器台



大甕



埴輪出土状況

黄牛塚古墳と周辺の古墳

黄牛塚古墳は、この地域に伝わる「後鳥羽上皇伝説」から、上皇が日撫神社へ奉納した黄毛の牛を埋めた塚とされていましたが、北陸自動車道工事に際しておこなわれた発掘調査で、横穴式石室が発見され、須恵器・土師器・勾玉などが出土しました。息長古墳群以外にも米原市内では、多くの古墳が見つっています。



石室検出状況
(滋賀県埋蔵文化財センター提供)



遺物出土状況
(滋賀県埋蔵文化財センター提供)

石淵山古墳

明治16～7年頃に、河南の石淵山一帯に分布する石淵山古墳群で、石灰岩の採石中に内行花文鏡が偶然発見されました。従来この鏡は仿製鏡とされていましたが、現在では大陸から持ち込まれた舶載鏡だと考えられています。



内行花文鏡（石淵山古墳）
【米原市指定文化財】

おきなごりょう
息長御陵
びだつ ひろひめ ま
敏達天皇の皇后広姫は息長真
て おう じよめい
手王の娘で、孫の舒明天皇、
その子の天智・天武天皇が即位したため、広姫の子彦人大兄皇子は「皇祖大兄」と呼ばれました。広姫の時代（6世紀後半）より古い5世紀末頃の埴輪が見つっています。



大乾1号墳



息長御陵（村居田古墳）

石見型埴輪

石見型埴輪は、奈良県三宅町石見遺跡出土の資料から設定されたもので、全国で約50前後の出土事例が知られていますが、滋賀県では、息長古墳群の山津照神社古墳と塚の越古墳でしか出土していません。守山市の服部遺跡や野洲市の林ノ腰古墳からは、木製のものが、福岡県岩戸山古墳では石製のものが出土しています。また、三重県松阪市宝塚1号墳では、石見型埴輪を甲板に立てた船形埴輪が出土しました。これらのことから、これまで盾の一種と考えられてきましたが、玉杖の頭飾りを模した威儀具として理解されています。5世紀後半には、大和政権にかかわる古墳にのみ立てられましたが、6世紀に入ると周辺部の近江や尾張など継体天皇と関わる地域に分布を広げており、注目されています。



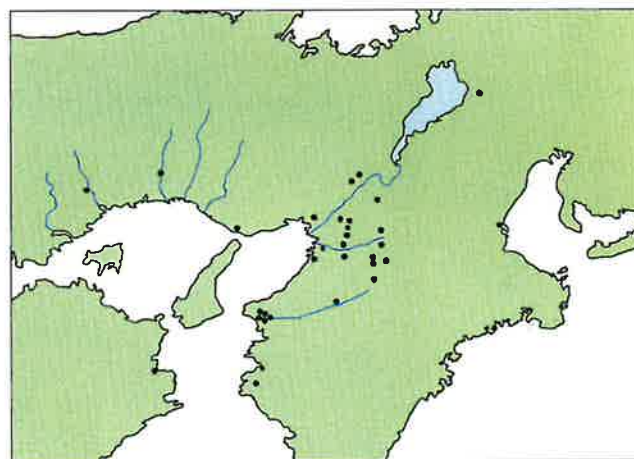
石見型埴輪（塚の越古墳）



塚の越古墳発掘状況



石見型埴輪（山津照神社古墳）
（安土城考古博物館2003より）



石見型埴輪の分布（安土城考古博物館2003より）



山津照神社古墳が語るもの

やまつてるじんじや

山津照神社古墳は、現在の米原市近江地域に分布する息長古墳群の中で、最後に築造された6世紀前半の前方後円墳であることがわかりました。この古墳は東西方向に主軸をとる前方後円墳で、陽のあたる側からの側面観を重視した造りとなっており、裾部には威儀具を模した石見型埴輪を巡らせ、須恵器祭祀をおこなった造り出し状の平地を背後のくびれ部に擁していたことが明らかになりました。

主体部である横穴式石室は、明治時代に埋め戻されていますが、二重構造の石室を持ち備えているか、家型石棺いえがたせっかんを納めていたか等、今後明らかにされるべき課題もたくさんあります。また、豊富で豪華な副葬品からは、大陵、北陵、湖西、東国との関わりが見られます。

この古墳は、継体天皇擁立期における地方豪族息長氏の動向を明らかにする上においても非常に重要な古墳といえるでしょう。

なお、明治時代に発見された山津照神社古墳出土品は、昭和32年8月26日付けで滋賀県指定有形文化財考古資料に指定されています。さらに、平成18年に金銅製冠などが追加指定されました。

山津照神社

米原市能登瀬のとせにある老樹に囲まれた落ち着いた雰囲気あまのがわの神社で、天野川北岸の丘陵地帯にあり、767年、この地を治めていた息長氏の祖神を祀って創建されたといわれています。入母屋造りの拝殿や流造りの本殿が建っています。

祭神は国常立尊くにのとこたちのみこと。鎌倉中期に後鳥羽天皇が宝剣を奉納したと伝えられています。5月5日の祭礼には「武家奴振り」ぶけやつこぶがおこなわれています。



【参考文献】

- 安土城考古博物館2003『日継知らず可き王無し ―継体大王の出現―』
- 大橋信弥2007『継体天皇と即位の謎』吉川弘文館
- 小野山節ほか1995『琵琶湖周辺の6世紀を探る』京都大学文学部考古学研究室
- 市立長浜城歴史博物館2002『湖北の王たち 神功皇后から継体天皇へ』
- 宮崎幹也2000『息長古墳群 1 遺跡詳細分布調査報告書』近江町教育委員会
- 宮崎幹也2001『県史跡 山津照神社古墳』（滋賀文化財教室シリーズ197）
- 森下章司ほか2005『定納古墳群』近江町教育委員会

【協力機関・協力者】

山津照神社・滋賀県教育委員会・滋賀県埋蔵文化財センター・滋賀県立安土城考古博物館
守山市教育委員会・野洲市教育委員会・米原市

息長氏の遺宝 ～山津照神社古墳とその周辺～ 2008.3.1

米原市教育委員会 〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206 TEL.0749-55-8106 FAX.0749-55-4040